

平成 17 年度情報経済基盤整備(アジアIT人材育成)

# A E N 国際会議

## 報告書

平成 18 年 3 月

特定非営利活動法人日本イーラーニングコンソシアム

## 6.AEN 国際会議

## 6.1 AEN 国際会議概要

AEN 国際会議を下記のように行った。

- ( 1 ) 開催日時：2005 年 12 月 14 日 9：00～12 月 15 日 17：30
- ( 2 ) 場所：有明ワシントンホテル（東京都江東区有明 3-1-28）
- ( 3 ) 概要スケジュール：表 1 の通り

表 6.1 AEN 国際会議スケジュール表

第 1 日 2005 年 12 月 14 日(水)		
9:00-13:00 ( 途中休憩 )	WG1 会議 場所：カトリア	WG2 会議 場所：リンドウ
13:00-14:00	昼食	
14:00-18:15 ( 途中休憩 )	ALIVE 場所：カトリア	早稲田大学遠隔教育見学 場所：早稲田大学 1 4 号館
18:30-20:00	懇親会 場所：メープル 1.主催者挨拶 2.各国自己紹介 3.閉会	
第 2 日 2005 年 12 月 15 日(木)		
9:00-12:00 ( 途中休憩 )	ALIVE 場所：カトリア	コンテンツデモ 場所：りんどう
12:00-13:00	昼食	
13:00-17:30 ( 途中休憩 )	全体会議 場所：アイリス 1.主催者挨拶 2.ADL 講演 3.各国 e ラーニング動向レポート 4.WG / ALIVE 報告 5.AEN 活動の総括 6.閉会の挨拶	

## (4) 参加者

アジアからの参加者は 11 ヶ国 23 名(表 6.2)であった。また、国内からの参加者は事務局を含め 30 名(表-3)であった。なお、これ以外に ADL の Ms.Brooks, Jennifer が特別に参加された。

表 6.2 アジア各国参加者一覧

国名	参加者氏名	人数
カンボジア	Mr. Om Sethy / Mr. Sok Tha	2
中国	Mr.Ronghuai HUANG / Mr.Shenquan YU	2
インドネシア	Mr. Robert Siagian / Mr. Binsar Siagian	2
韓国	Mr.Ju Hyung Lee / Mr.ChoonWon Park / Mr.Jae Young Shim	3
ラオス	Ms. Khampheng Phathadavong	1
マレーシア	Mr. David Asirvatham / Mr. Muhammad Hasan	2
ミャンマー	Dr. Pyke Tin / Dr. Aye Thanda	2
フィリッピン	Prof. Rufino Mananghaya / Dr. Benito Teehankee	2
シンガポール	Mr. Lim Kin Chew / Mr. Daniel Tan	2
タイ	Dr. Niracharapha Thongdhamachart / Mr. Wasin Sinthupinyo	2
ベトナム	Mr.Lam Quang Nam / Dr. Nguyen Ngoc Binh / Mr.Tin Nguyen Ba	3

表 6.3 国内参加者一覧

所属組織	氏名	所属組織	氏名
A E N 委員会	坂元 昂	経済産業省	江崎 正邦
	小松 秀園		大澤 一郎
	広瀬 雅利		皮籠石 直征
WG1メンバ	仲林 清		菊田 真希
	宮内 浩		田代 秀一
	樋田 稔	e L C	加藤 憲治
	柴田 晋吾		関戸 弥寿雄
WG2メンバ	宮沢 修二	C I C C	永谷 光行
	増島 涼子		渡辺 千秋
ALIVEメンバ	熊澤 剛	事務局	寺田 佳子
	辻 賢一		小林 俊之
	小阪 洋一		吉野 充子
	中島 哲		吉村 陽介
	阮 君華		臼井 建彦
			高橋 和彦
			宗本 利男

## (5) プログラム概要

以下に 14 日～15 日実施した WG 活動や会議の概要を紹介する。なお、WG 活動の詳細についてはそれぞれの章で記述を行っている。

### 1) WG1 (WG1 の報告書で詳細を記述)

相互運用性について下記のように検討を行った。

- ・開会の挨拶：仲林リーダ
- ・ADL 講演：Ms.Brooks, Jennifer
- ・各国状況報告：各国参加者
- ・意見交換：参加者
- ・まとめ：仲林リーダ

### 2) WG2 (WG2 の報告書で詳細を記述)

- ・開会の挨拶：宮沢リーダ
- ・WG2 活動計画と活動状況報告：小林 (宮沢代理)
- ・各国状況報告：各国参加者
- ・意見交換：参加者
- ・まとめ：宮沢リーダ

### 3) ALIVE (ALIVE の報告書で詳細を記述)

- ・開会の挨拶：熊沢リーダ
- ・スケジュール / 実験手順の等の説明：事務局 (辻)
- ・実験用コンテンツの回収と配布：実験参加者
- ・実験の実施：実験参加者
- ・結果発表準備：実験参加者
- ・実験結果の発表：実験参加者
- ・実験結果のまとめ：事務局 (辻)
- ・テストスイートによる実験のまとめ：事務局 (辻)
- ・意見交換：実験参加者
- ・ADL の感想・コメント：ADL
- ・まとめ：熊沢リーダ

### 4) コンテンツプレゼンテーション

- ・SCORM アセッサ制度の概要：事務局
- ・SCORM アセッサコンテンツの実演：事務局
- ・SCORM 2004 サンプルコンテンツの実演：事務局
- ・質疑応答：全員

### 5) 早稲田大学遠隔教育センター見学

- ・移動 (有明 早稲田): 全員
- ・早稲田大学より挨拶：早稲田大学
- ・遠隔教育センターの紹介：早稲田大学

- ・ オンデマンド授業流通フォーラム：早稲田大学
- ・ アジア展開構想の紹介：早稲田大学
- ・ 質疑応答：全員
- ・ 移動（早稲田 有明）：全員

6) 全体会議

- ・ ご挨拶：AEN 推進委員会委員長 坂元氏 / 経済産業省 江崎氏
- ・ ADL 講演：Ms. Brooks, Jennifer
- ・ 各国 e ラーニング状況報告：各国代表者
- ・ WG1 報告：仲林リーダ
- ・ WG2 報告：宮沢（小林）リーダ
- ・ ALIVE 報告：辻氏
- ・ AEN 活動総括：経済産業省 大澤氏
- ・ 意見交換：全員
- ・ 閉会の辞 / 記念撮影

## 6.2 コンテンツプレゼンテーション

A E N ポータルサイトで紹介する予定のコンテンツを A E N メンバに紹介する目的で実施した。参加者は約 15 名であり、盛況であった。

紹介したコンテンツは WG 1 が開発した「SCORM2004 サンプルコンテンツ (少年野球編)」および昨年度開発した「SCORM アセッサ研修コンテンツ」の 2 本であった。

「SCORM2004 サンプルコンテンツ」は、SCORM2004 規格対応コンテンツ作成技術を習得するために、SCORM2004 の特長を組み込んだコンテンツ事例であり、3 種類開発したうちの 1 種類 (少年野球編) をプレゼンテーションした。SCORM2004 規格は SCORM1.2 では実現できなかったコンテンツを容易に作成できることを現実に見てもらうことで、多くの参加者に興味を持ってもらうことができ、多数の質疑応答があった。蛇足ではあるが、この事例に用いた「野球」は国によっては普及していないスポーツのようであり、その点での興味も持たれたようだった。

「SCORM アセッサ研修コンテンツ (英語版)」は SCORM アセッサ資格制度や SCORM 規格について習得できるコンテンツである。SCORM アセッサ資格制度の AEN 各国展開は本コンテンツを各国に提供して推進予定である。本コンテンツの標準学習時間は 10 時間であるが、今回は特徴的な部分のみを 30 分でデモンストレーションした。

これまでに、SCORM アセッサ資格制度について、WG2 の国際会議等で説明してきたが、時間の制約等もあり充分には理解してもらえなかった。今回のプレゼンテーションにより、参加者は帰国後、SCORM アセッサ資格制度の導入検討を関係者にどのように進めればよいかのイメージが描けたものと思う。プレゼンテーション終了後、各国展開に係る多くの質疑応答が行われた。

### 6.3 早稲田大学遠隔教育センター見学

センターの見学には 10 名が参加した。有明から早稲田への地下鉄乗換えで苦労し、30 分の遅刻で早稲田の遠隔教育センターへ到着した。

下記は大隈氏銅像の前で取った記念写真である。



遠隔教育センターでは下の写真のようにシステムの紹介やオンデマンド授業流通フォーラムまた、こうしたフォーラムの大学連携のお話を早稲田大学のご担当から頂き、質疑応答を活発に行って終了した。以下に代表的な質問を紹介しておく。

- ・ 講座の受講料...学生は原則無償（授業料に含めている）
- ・ 単位取得が可能かどうか...単位として認定される
- ・ 企業の寄附講座の選択...大学に選定基準があり、それに順ずるものを選ぶ



#### 6.4 全体会議

全体会議は AEN 各国メンバ 23 名と国内からは AEN 推進委員会メンバ、各 WG メンバ および事務局として経済産業省メンバ / C I C C メンバ / E L C メンバ 総勢 25 名の参加を得て開催した。

##### ( 1 ) 主催者挨拶

まず、AEN 推進委員会 委員長 坂元氏(写真中央)より以下の挨拶があった。



要旨：本会議を通して情報共有を図り、自国における相互運用性および e ラーニングに関する技術知識の普及促進に役立てていきたい。

次に経済産業省 大臣官房審議官( 商務情報政策局担当 ) 江寄氏( 写真右から 2 人目 ) より本会議への参加への御礼と e ラーニングによる人材育成推進についての期待がコメントされた。

##### ( 2 ) ADL 講演

ADL より来日された Ms. Brooks 氏より ADL の活動紹介と SCORM の現状についてプレゼンテーションがあった。



要旨：ADL の組織、役割、SCORM の管理内容、SCORM 適合製品の認証状況、海外での SCORM プロモーション活動、最後に豪州で開催されたフォーラムで参加各国が提出した SCORM に対する各国の見解を紹介し、SCORM 管理における共通性の存在を示唆した。また、SCORM1.2 と SCORM2004 の開発動向は同じであるため、いずれ SCORM2004 も SCORM1.2 のように普及するであろうとの見解を示した。



( 3 ) 各国 e ラーニングレポート発表

各国から e ラーニングの普及や標準化へのアプローチなど説明があった。( 詳細は付録の各国発表資料を参照の事 )

カンボジア ( Mr. Sethy )



・ 同国における ICT (Information, Communication and Technology) の現状を報告頂いた。 e ラーニングの導入はまだ初期で、今後の普及方針と課題を紹介し、その実現のための他国とのパートナーシップの必要性を強調した。

インドネシア ( Mr. Siagian )

・ 教育現場における ICT 導入の現状と全国規模の e ラーニング会議やワークショップの報告を頂く。



韓国 ( Mr. Shim )



・ 政府が主体となって支援している e ラーニング推進活動を報告して頂く。 2004 年に 260 万ドルであった e ラーニング市場が 2010 年までに 680 万ドル市場に成長する見通し。

マレーシア (Mr. Asirvatham)

・インフラがほぼ整備され、ICT アジェンダ「ビジョン 2020」の第 1 フェーズを完了し、今年、第 2 フェーズに入った。また、今年 ASEAN e ラーニングセンターを開設し、e ラーニング会議が行われた。



フィリピン (Prof. Mananghaya)



・eラーニングの普及状況を初等・中等教育と高等教育に分け、また特にコンテンツ開発を中心に報告頂いた。来年、学生の知識向上と中退率低下の目的で、ある学校とマイクロソフト・フィリピンが提携し、中等教育向けにトレーニング教材を開発する予定。

シンガポール (Mr. Chew)

・eラーニングは企業より学校での利用が活発なため、学校における IT 教育の現状を報告頂く。政府はこれまで財政的支援のみで eラーニングの標準化にあまり積極的ではなかったが、徐々に SCORM を推進する兆しが見えてきている。



タイ (Dr. Thongdhamachart)



・情報通信技術省、教育省、科学技術庁の各省庁が取り組んでいる eラーニングプロジェクトの紹介をして頂く。昨年、国立 ICT ラーニングセンターが設立した。

ベトナム (Mr. Lam)

・教育機関と企業の両側面から見た eラーニングの現状と将来の予測を報告頂いた。今年 3 月にハノイで eラーニング研究開発会議を開催した。



日本 (仲林氏)



・企業と高等教育機関における eラーニング普及状況と eラーニング普及のための政府の政策を報告した。

ミャンマー (Dr. Tin)

・自国の教育制度から IT 教育への取り組みまで幅広く紹介頂く。IT 教育の展開として、全ての大学に IT 部門を設立するプランを立てている。



( 4 ) WG / ALIVE 報告

14日～15日AMに行われた各WGの活動成果の発表があった。

WG1 ( 仲林氏 : WG1 リーダ )



・WGのビジョン、WG発足の背景、議題、参加各国発表内容のサマリー、各国共通の課題、標準化の展開状況を報告。最後にSCORM1.2基礎仕様が定着し、今後は新出のテクノロジーに対する取り組みの必要性があることを伝えて締めくくった。

WG2 ( 小林氏 [ 宮沢氏 : WG2 リーダ代理 ] )  
・WGの目的、昨年度と本年度の活動目標および結果、SCORMアセッサ制度に関するアンケート調査結果、SCORM2004の普及活動を報告し、日本政府およびeLCを代表して参加国にSCORMや相互運用性の研究の継続を要請した。



ALIVE ( 辻氏 [ 熊沢氏 : ALIVE リーダ代理 ] )



・本活動の目的、テスト方法、SCORM1.2とSCORM2004両方のテスト結果、テスト実施後の参加国のコメントを報告。総括として、過去2年間のテストと違い、今回は大きな問題が起こらなかったのは進展したということであり、今回のテスト結果をもとに各国が新しい目標を立て、次のステップへと研究を進めて欲しいと述べた。

## ( 5 ) AEN 活動の総括 ( 経済産業省 : 大澤氏 )

・アジア e ラーニング構想および AEN 発足の経緯と目的、AEN の過去の活動を振り返り、AEN 活動を以下のようにまとめた。

- a) AEN の目標は達成され、公式の AEN 会議および WG は終了する。
- b) 今後は AEN のポータルサイトで最新動向・技術の情報共有を図る。
- c) 各国は AEN 活動の成果を活かし、引き続き e ラーニングの普及に努める。
- d) 各国は SCORM 対応コンテンツを作成し、アジアにおける相互運用性の確保に努める。
- e) メンバ国間の意見交換と情報共有のために、1 年以内に AEN のポータルサイトの機能と運営方法を見直す。



最後に、今後は e ラーニング普及への原動力と活動を AEN コミュニティーに移す意向を表明した。

このあとメンバによる意見交換を行った以下にそれらを示す。

- ・ AEN 活動は自国にとってとても有意義であった。開催国日本と事務局に感謝する。
- ・ こういう形での会議は終わりになるが友好関係をもっと深めて、さらに別の形態での開催を希望する。
- ・ 今後は、ウェブ会議で各国が意見交換やプレゼンテーションを行ってはどうか。
- ・ 今回は第 1 フェーズの「おわり」であり、第 2 フェーズの「始まり」である。各国連携して e ラーニングや SCORM の普及に努めたい。
- ・ SCORM2004 は、未だ普及していない。AEN は、これからもアジアの関係諸国間で、対話を続けていきたいと思う。
- ・ AEN は、アジアだけでなく、アジアとヨーロッパ間の協調も大切であり、アメリカを始めカナダ、オーストラリア等も招聘して、もっと多くのプログラムに取り組む必要がある。
- ・ 経済産業省による挨拶 ( 田代氏 )



・ 今回が最後の AEN 会議となるが、これまでの AEN 活動で e ラーニングに関する多くのプロジェクトが実施され、良い結果が残せた。今回で会議は終わるが、ここで築かれた人間関係は終わらない。この人間関係がお互いに良い影響を与え、METI や他のセクタの活動が将来の e ラーニングシステムの活用に貢献することを希望する。

以上